

2019（令和元）年度 京都大学とカリフォルニア大学デービス校との 覚書に基づく事務職員のインターンシッププログラム報告書

2020（令和2）年2月7日

京都大学附属図書館学術支援課学術支援掛
村上 史歩

目次

1. 研修の概要
2. カリフォルニア大学デービス校での実務研修及び調査
3. 他機関への訪問調査
4. 研修成果の活用方法・フィードバック
5. おわりに

1. 研修の概要

1.1. 目的

京都大学とカリフォルニア大学デービス校（UC Davis）との覚書に基づく事務職員のインターンシッププログラムにより、2019年10月1日から11月30日までの期間、UC Davisにおいて研修を行った。原則として毎年交互に1名の職員をインターンとして相手大学に派遣する本プログラムは2006年より始まり、本学からの研修生は私で5人目となる。

この研修にあたっては、研修生自らが特定の研修テーマ及び調査計画を設定することが求められていた。本プログラムにおける図書系職員の派遣は今回が最初であったことから手探りの部分も多く、テーマ設定をどうするか悩んだが、最終的に「オープンアクセス及びオープンサイエンスに向けた取り組みに関する実務研修及び調査」を主なテーマとした。

このテーマを選択した背景として、現在、京都大学図書館機構が「京都大学重点戦略アクションプラン（2016-2021）」の一環として進めている「京都大学オープンアクセス推進事業¹」がある。当事業では、WINDOW構想²の実現及びオープンサイエンスの発展に寄与するため、「京都大学オープンアクセス方針³」に基づき、京都大学学術情報リポジトリKURENAI等を主な基盤として、学術論文等の研究成果の収集と発信を推進していることが挙げられる。また、現在の業務が機関リポジトリ担当であり、日本にはないオープンア

¹ <https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/content0/1373844>（最終アクセス：2020/02/07）

² <http://www.kyoto-u.ac.jp/window/>（最終アクセス：2020/02/07）

³ <https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/content0/13092>（最終アクセス：2020/02/07）

セスの取り組みや最新の動向について知ること、本学での実際の業務にも生かすことができる考えたためである。

ただし、私自身、前年度に京都大学の職員として採用されたばかりで、図書系職員としての業務経験がまだ浅かったことから、幅広い図書館サービスについて理解を深め、視野を広げるため、その他の図書館業務全般に関する実務研修及び調査も研修計画に含めた。

以上のことから、本研修では、京都大学における当事業の次の展開に資することを目的として、UC Davis を始めとするアメリカの機関を訪問し、先進的なオープンサイエンスの取り組みについて情報収集を行った。本報告書における記述は、これらの調査で得た情報を元に行っている⁴。

以下、具体的な研修内容について UC Davis とその他の機関に分けて章立てし、研修成果の活用方法・フィードバックについては第 4 章にまとめて記述した。

1.2. 日程・主な研修先（10 月 1 日～11 月 30 日）

日程	研修先
	対応者（敬称略）
2019（令和元）年 10 月 1 日	出国、現地到着
10 月 2 日	UC Davis の Peter J. Shields Library にて研修開始 Michael Ladisch (Scholarly Communications Officer)
10 月 7 日	UC Davis Global Affairs 訪問 https://globalaffairs.ucdavis.edu/ Aspen Felt (Study Abroad Program Coordinator and Advisor) Karen Beardsley (Director, Global Professional Programs) Jennie Konsella-Norene (Assistant Director, Global Professional Programs) Wesley Young (Director, Services for International Students and Scholars)
10 月 8 日	UC Davis Global Affairs 訪問 Fadi Fathallah (Associate Vice Provost of Global Education and Services) Jim Rix (Chief of Staff)

⁴ 報告書本文の内容は、全て調査時（2019 年 10～11 月）のものである。

10 月 18 日	Access and Delivery Services 部門担当者とのミーティング
	Robin Gustafson (Access Services Department Head)
10 月 28 日	University of the Pacific への訪問調査 https://www.pacific.edu/
	Michael Wurtz (Assistant Professor, Head of Special Collections) Jeremy Hanlon (Innovation Spaces Coordinator) Michele Gibney (Head of Publishing and Scholarship Support) Veronica Wells (Associate Professor, Head of Library Research and Learning Services)
10 月 29 日	Content Support Services 部門担当者とのミーティング
	Xiaoli Li (Department Head)
11 月 5 日	Archives and Special Collections 部門担当者とのミーティング
	Kevin Miller (Interim Head of Special Collections & University Archivist)
11 月 6 日	Collection Strategies 部門担当者とのミーティング
	Bob Heyer-Gray (Head, Collection Strategies)
11 月 18 日	California State University, Sacramento への訪問調査 https://www.csus.edu/
	Daina Dickman (Scholarly Communication Librarian, Collection Management Services) Suzanna Conrad (Associate Dean for Digital Technologies & Resource Management, Library Administration) David Gibbs (Head, Collection Management Services, Collection Management Services) Elyse Fox (Library Services Specialist III, Collection Management Services) Erik Beck (Head, Library Systems & Information Technology Services, Library Systems & Information Technology Services) Rachel Keiko Stark (Health Sciences Librarian, Research and Instruction)

11 月 22 日	研修関係者とのランチミーティング及び成果報告 Beth Callahan (Associate University Librarian Research and Learning) Michael Ladisch (Scholarly Communications Officer) Jennie Konsella-Norene (Assistant Director, Global Professional Programs)
11 月 25 日	California Digital Library への訪問調査 https://cdlib.org/ Alainna Therese Wrigley (Publication Management System Manager, Publishing and Special Collections) Catherine Mitchel (Director, Publishing and Special Collections) Rachel Lee (Publications Manager, Publishing and Special Collections)
	UC Berkeley への訪問調査 https://www.berkeley.edu/ Rachael G. Samberg (Scholarly Communication Officer, Scholarly Communications) Timothy Vollmer (Scholarly Communication and Copyright Librarian, Scholarly Communications)
11 月 27 日	最終レポート提出、研修終了
11 月 28 日	デービス出発、空港周辺のホテルへ移動
11 月 29 日	アメリカ出国
11 月 30 日	帰国

※なお、色を塗った箇所は UC Davis Library での研修内容である。

1.3. 研修期間中の諸活動

- ① UC Davis におけるオープンアクセス及びオープンサイエンスに向けた取り組みに関する調査（各種ミーティングへの参加、インタビュー、ウェブ等での情報収集）
- ② UC Davis Library の各部門の業務に関するインタビュー調査

- ③ 近郊の他機関への訪問調査
- ④ Global Affairs の業務に関するインタビュー調査及び各種イベントへの参加
- ⑤ 教員や学生との交流イベントへの参加

※なお、④及び⑤については研修テーマから離れるため、本報告書では割愛する。

2. カリフォルニア大学デービス校での実務研修及び調査

UC Davis は、カリフォルニア州デービス市の中心にある州立大学で、カリフォルニア大学 (University of California: UC) の 10 キャンパスのうちのひとつである。学生数は約 38,000 人 (大学院生等を含む)、102 の学科と 101 の学位プログラムがある⁵。元々は UC Berkeley の農業学校として設立され、現在でも農学や獣医学は全米でトップレベルである。

UC Davis には主な図書館が 4 つあり、全体での年間の利用者数は 166 万人以上、コレクション数は 1,000 万件以上である⁶。私はその中でも、キャンパスの中心に位置する Peter J. Shields Library⁷を拠点とし、Scholarly Communications Officer の Michael Ladisch 氏の支援のもとに研修を進めた。Content Support Services 部門に日本人スタッフが 1 名おられたので、その隣に私のデスクを用意してもらった。基本的には Ladisch 氏のオフィスで過ごすことが多かったが、空き時間には自分のデスクで調べものやレポート執筆を行っていた。

2.1. オープンアクセス及びオープンサイエンスに向けた取り組み

2.1.1. Scholarly Communications Officer の業務の概要

UC には Office of Scholarly Communication⁸という組織があり、オープンデータ及びオープンアクセスの推進はその主な活動の一つである。Michael Ladisch 氏は、UC Davis の Scholarly Communications Officer としてこの組織に所属しており、他にも UC の各キャンパスや California Digital Library 等から 15 名が参加している。

UC Davis での Ladisch 氏の主な業務内容は、①学術出版、②著作権、③計量書誌学の 3 分野に大きく分けられる。①には、オープンアクセス出版の支援やオープンアクセス基金、信頼できるジャーナルの選定、ハゲタカジャーナル関連の対応等が含まれる。②については、Ladisch 氏の前任者の専門分野であったが、それを引き継いで問い合わせへの対応等を行っている。③は Scholarly Communications Officer としての業務ではないが、Ladisch 氏の以前からの研究分野であり、インパクトファクターや h-index に関する調査を行っているとのことである。

本報告書では、特に詳しく話を伺うことができたオープンアクセス出版、オープンアクセ

⁵ <https://www.ucdavis.edu/about/facts> (最終アクセス : 2020/02/07)

⁶ <https://www.library.ucdavis.edu/about/> (最終アクセス : 2020/02/07)

⁷ <https://www.library.ucdavis.edu/library/peter-j-shields/> (最終アクセス : 2020/02/07)

⁸ <https://osc.universityofcalifornia.edu/> (最終アクセス : 2020/02/07)

ス基金、著作権関連業務についてまとめている。

2.1.2. オープンアクセス出版⁹

Ladisch 氏より、オープンアクセスに関する UC と出版社との契約状況について伺った。UC が 2019 年にケンブリッジ大学出版局（Cambridge University Press : CUP）と契約を交わしたことで、UC の構成員は、多くの CUP の学術誌に無料でアクセスしたり、研究成果をオープンアクセスで出版したりすることが可能になった。Wiley 社や Springer 社とも交渉を続けているが、Elsevier 社とは現在交渉が決裂している¹⁰。

Elsevier 誌の購読停止に対して、図書館はジャーナルにアクセスするための様々な代替手段を用意しているが、研究者からは不満の声も多く寄せられている。Ladisch 氏は、Unpaywall や ILL は有効な手段だと思うが、論文にアクセスするまでに必要な手順が多く、研究者は面倒に感じているのかもしれないと仰っていた。なお、UC Davis Library では、関係者 7～8 名によるテレビ会議が定期的に開催されており、Elsevier 社との契約解除に関する研究者からのメールの内容やその他の関連事項について、報告や意見交換が行われているとのことである。

2.1.3. オープンアクセス基金¹¹

この基金は、UC Davis が独自で運営しているサービスで、UC Davis の研究者がオープンアクセスジャーナルに論文を投稿した場合、論文掲載料（APC）助成費用として、最大 1,000 ドルを図書館が負担するというものである。ただし、助成が可能なのは全ての論文をオープンにしているフルオープンアクセスジャーナルのみで、ハイブリッドジャーナルは対象外としている。図書館側の具体的な作業手順は下記の通りである。

- (i) 研究者が Open Access Fund Application¹²に論文等の情報を入力して申請すると、UC Davis の図書館員にメールが届く。
- (ii) Scholarly Communications Officer は、DOAJ¹³等を利用し、その論文がオープンアクセスジャーナルに投稿されたものかどうか調査する。
- (iii) オープンアクセスジャーナルであることが判明したら、研究者に Acceptance Letter の送付を依頼する。
- (iv) 職員専用サイト内のリストに申請情報を追加する。財務部門とも連携して処理を行う

⁹ <https://www.library.ucdavis.edu/service/open-access-publishing/>（最終アクセス：2020/02/07）

¹⁰ <https://www.library.ucdavis.edu/uc-elsevier/>（最終アクセス：2020/02/07）

¹¹ <https://www.library.ucdavis.edu/guide/open-access-fund/>（最終アクセス：2020/02/07）

¹² <https://forms.library.ucdavis.edu/oafunds/>（最終アクセス：2020/02/07）

¹³ <https://doaj.org/>（最終アクセス：2020/02/07）

が、その進行状況によって、「In Process」→「Accounting」→「Complete」と表示が変化する。

- (v) Excel に申請者、論文タイトル、共著者、申請・承認日時、助成金額等の情報を入力し管理する。

研究者はこの基金を何度でも利用することができる。ただし、申請は1つの論文につき1回限りで、例えば同じ論文に対して2名の共著者が別々に申請するといったことは認められない。昨年度は、年間で2万ドル以上を助成金として使用したとのことである。

なお、オープンアクセスで図書を出版したい場合は、TOME Open Access Monograph Fund¹⁴という別の基金による支援を受けることができる。

2.1.4. 著作権サポート¹⁵

Scholarly Communications Officer のもとは、メール等で週に1~2回程度、教員や学生から著作権に関する質問が寄せられている。質問の内容は、①教育、②出版の大きく2種類に分けられる。①に関しては、他人の著作物を授業で教材として使用する場合や、ウェブに教材をアップロードして共有する場合、②に関しては、論文に図を使用する場合や、著作権侵害から自分の著作物を守る方法等に関する質問がある。Ladisch 氏は、専門家ではないため法的な指導はできないが、ウェブサイト等を参考にしつつ、適宜提案を行っていると仰っていた¹⁶。

私も何度か対面での打ち合わせに同席する機会があった。そこでは、オープンアクセス出版、特に UC の機関リポジトリである eScholarship¹⁷での出版を検討中の心理学研究者からの相談に乗ったり、ウェブ上で写真を公開する際にはどのように許諾を得ればよいか、またどのような問題が起こりうるかについて、他の図書館員に助言したりしていた。一方で、不明な点が出てきた際には、著作権の専門家や他の図書館関係者とのテレビ会議を開催することもあった。

また、著作権について理解を深めるため、様々なウェビナーやビデオ講義を受講している

¹⁴ <https://www.library.ucdavis.edu/guide/tome-fund/> (最終アクセス：2020/02/07)

¹⁵ <https://www.library.ucdavis.edu/service/scholarly-communications/copyright-and-licensing/> (最終アクセス：2020/02/07)

¹⁶ 下記の5つのサイトを紹介していただいた。

<http://copyright.universityofcalifornia.edu/index.html> (最終アクセス：2020/02/07)

<https://copyright.cornell.edu/publicdomain> (最終アクセス：2020/02/07)

<https://librarycopyright.net/> (最終アクセス：2020/02/07)

<https://www.copyright.gov/> (最終アクセス：2020/02/07)

<https://fairuse.stanford.edu/> (最終アクセス：2020/02/07)

¹⁷ <https://escholarship.org/> (最終アクセス：2020/02/07)

とのことで、研修中は私も一緒に受講した。私が視聴したウェビナーは以下の 3 つである。

- CopyTalk Webinar: A Creative and Poetic Approach to Creative Commons Copyright License Education¹⁸
- Copyright Law and the Public Domain¹⁹
- Copyright and the Artstor Digital Library by Meg O'Hearn²⁰

どのウェビナーも、基本的には誰でもリアルタイムで参加でき、コメントを投稿するなどして講師とやり取りすることができた。講義終了後には、視聴者から質問を募集したり、すぐに結果が見られる簡単なアンケートを実施したりすることもあり、見ている側も積極的に参加できる形式になっていた。

また、coursera の Copyright for Educators & Librarians²¹というコースも受講した。coursera は様々なオンライン講義を提供しているウェブサイトである。誰でも無料で登録でき、講義の字幕も閲覧可能である。本コースは、アメリカの Duke University²²、Emory University²³、The University of North Carolina at Chapel Hill²⁴によって提供されている。4つのパートに分かれており、講義を視聴した後、講義の内容に関連する文書を読み、最後にクイズに答えるという形式になっている。クイズでは具体的な事例に関する内容が問われ、頭に入りやすかった。

これらのウェビナーやウェブ講義を通して、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスやパブリックドメイン、フェアユース²⁵等を含むアメリカの著作権の枠組みについて、理解を深めることができた。日本とアメリカの著作権法には共通している部分も多かったが、フェアユースの柔軟な概念はなじみがなく、大変興味深く感じた。日本でも、例えば教育目的であれば著作権者の許可なしに著作物を利用できる場合があるが、フェアユースはより抽象的で、様々な要素を加味した上での判断が必要なようだった。一方で、著作権法にフェアユースが採用されている国はほぼないが、日本とイスラエルでのみよく似た考え方が導入され

¹⁸ <https://www.acrl.org/acrlinsider/archives/18212> (最終アクセス : 2020/02/07)

¹⁹ <https://www.artstor.org/webinars/copyright-law-and-the-public-domain/> (最終アクセス : 2020/02/07)

²⁰ <https://www.artstor.org/webinars/copyright-and-the-artstor-digital-library/> (最終アクセス : 2020/02/07)

²¹ <https://www.coursera.org/learn/copyright-for-education> (最終アクセス : 2020/02/07)

²² <https://www.duke.edu/> (最終アクセス : 2020/02/07)

²³ <http://www.emory.edu/home/index.html> (最終アクセス : 2020/02/07)

²⁴ <https://www.unc.edu/> (最終アクセス : 2020/02/07)

²⁵ 特定の場合における作品の使用がフェアユースに該当するかどうかは、使用目的等の 4つの要素を考慮して裁判所によって判断される。著作権者の権利に関わらず、フェアユースに該当すると判断されれば、著作権侵害とはみなされない。

ていると Copyright for Educators & Librarians の講師が仰っていたのが印象的だった。

2.2. 図書館の各部門の業務

本研修では、UC Davis Library の Access and Delivery Services 部門、Content Support Services 部門、Archives and Special Collections 部門、Collection Strategies 部門の担当者にインタビューを行う機会を得た。

以下、ミーティングを行った順に調査内容をまとめた。

2.2.1. Access and Delivery Services (ADS) 部門

部門のトップである Robin Gustafson 氏より、業務の概要について話を伺った。ADS 部門は、主に図書の貸出・返却、ILL、建物や学習スペースの管理、セキュリティに関わる部門である。Peter J. Shields Library の入り口付近にある、教員著作や新着図書、政府資料の展示コーナーの管理も行っている。

ADS 部門には 20 数名の職員がおり、学生スタッフは 70～80 名ほどである。学生スタッフは、Shields Library Information Desk²⁶でのサービスも行っている。基本的には英語による対応のみであるが、多くの学生スタッフがいるため、他の言語でも対応が可能な場合がある。現在は、ロシア語やスペイン語を話せるスタッフがいるとのことである。

図書の貸出について、自動貸出機は導入されておらず、全ての手続きがカウンターで行われている。貸出冊数は年々減少しているが、Gustafson 氏は、UC の学習管理システムである canvas²⁷によって、PDF で閲覧可能な資料が増えていることも原因の一つではないかと仰っていた。

学生は、canvas 及び Course Reserves²⁸を無料で利用することができる。Course Reserves は、授業で使う教材を図書館で確保して学生に提供するというサービスである。よく利用される資料は複本も多いが、できる限り多くの学生が教科書を購入することなく利用できるように、基本的には 2 時間以内に返却しなければならない（日をまたぐことができる場合もある）。Course Reserves の資料や DVD 等は ADS 部門の事務室に保管しており、誰でも簡単に持ち出すことができないようになっている。canvas は読書リストや電子教材、Course Reserves は主に紙媒体の教材を提供しているという点で違いがある。

他の図書館と共同で行っているサービスとしては、24/7 Chat²⁹が挙げられる。24 時間、毎日いつでも図書館員に質問することができるというものである。また、UC Davis の生徒

²⁶ <https://www.library.ucdavis.edu/service/researchsupport/> (最終アクセス : 2020/02/07)

²⁷ <https://login.canvas.ucdavis.edu/> (最終アクセス : 2020/02/07)

²⁸ <https://www.library.ucdavis.edu/service/course-reserves/> (最終アクセス : 2020/02/07)

²⁹ <https://www.questionpoint.org/crs/servlet/org.oclc.home.TFSRedirect?virtcategory=12567> (最終アクセス : 2020/02/07)

は、申請すれば California State University, Sacramento や Stanford University の図書館も利用することができる。

また、障害者に対しては、コピーやスキャンに関する支援、特別な機械やソフトウェアを使用した支援等を行っている。UC Davis Student Disability Center³⁰ や Disability Management Services³¹とも連携を取っている。

その他、資料以外の様々な物品の貸出サービスも行っている³²。充電ロッカー（ロッカーの中にコンセントがあり、PC を入れて充電可能）、バッテリー、電源コード、ノイズキャンセリングヘッドフォン等を利用することができる。Gustafson 氏によると、特にヘッドフォンを利用する学生が多いとのことである。

2.2.2. Content Support Services 部門

部門のトップである Xiaoli Li 氏より、業務の概要について話を伺った。この部門は、Metadata Creation ユニット、Digital & Archival Metadata ユニット、Collection Maintenance ユニット、Acquisitions & Licensing ユニットの 4 つに分かれており、職員が約 25 名、学生スタッフが約 12～15 名、合わせて約 40 名程度が所属している。

Metadata Creation ユニットは、主に目録を担当している。現在、Specialist がいるのは日本語と中国語のみだが、ドイツ語やスペイン語、フランス語、イタリア語等にも対応可能とのことであった。また、UC の各キャンパスとも連携しており、Davis にはその言語に詳しい図書館員がいないが他のキャンパスにはいるという場合もあるので、互いに質問しあえる体制になっている。メタデータ作成には OCLC³³のレコードを活用しており、業務システムとしては Primo³⁴や Alma を利用しているとのことである。Collection Maintenance ユニットは図書の配置換えや製本、修理、Acquisitions & Licensing ユニットはコンテンツに関する交渉やライセンス付与を主に担当している。

購入する図書の決定については、Subject Specialist Librarians 及び Collections Strategies 部門の職員が行っている。紙媒体の資料以外にも、CD や DVD、地図等の資料を受け入れている。CD の受け入れは徐々に減少しているが、UC Davis にある図書館の一つである Blaisdell Medical Library³⁵では、Peter J. Shields Library よりもオーディオ系の教材の需要が高いなど、図書館によって状況は異なるとのことである。購入費用の管理等の会計業務は別の部署が行っている。ただし、電子リソースについては UC 全体でまとめ

³⁰ <https://sdc.ucdavis.edu/>（最終アクセス：2020/02/07）

³¹ <https://hr.ucdavis.edu/departments/elr/dms>（最終アクセス：2020/02/07）

³² <https://www.library.ucdavis.edu/service/lockers-and-studyequipment/>（最終アクセス：2020/02/07）

³³ <https://www.oclc.org/en/home.html>（最終アクセス：2020/02/07）

³⁴ <https://search.library.ucdavis.edu/>（最終アクセス：2020/02/07）

³⁵ <https://www.library.ucdavis.edu/library/blaisdell-medical/>（最終アクセス：2020/02/07）

て購入しており³⁶、アクセス状況の分析は今のところ行っていないとのことであった。

2.2.3. Archives and Special Collections³⁷部門

2.2.3.1. スペシャルコレクションの概要

部門のトップである Kevin Miller 氏より、UC Davis が所蔵しているスペシャルコレクションの概要について話を伺った。スペシャルコレクションは 1966 年 7 月に設立され、農学、食品科学、医学、人文学等、様々な分野の貴重な資料が保管されている。特徴的なものとしては、サクラメントやデービスに関する新聞等の地域資料、特産品であるワインやトマト、蜂蜜に関する資料、ネイティブアメリカンや LGBT に関する資料、詩や原稿（未出版のものを含む）、歴史的な写真や地図、寄贈された絵画等が挙げられる。

閲覧室の開室時間は 10:00～17:00 で、6～7 名のスタッフがいる。学内外問わず誰でも利用できるが、資料を利用したい場合は、Special Collections Request System の Aeon³⁸を通して申し込みを行う必要がある。Google ドライブやメールでデータを送信するデジタルデリバリーや、他のキャンパスへの貸し出しも行っている。Miller 氏によると、UC Berkeley での利用が多いとのことである。

デジタル化されている資料も多く、UC Davis Library Digital Collections³⁹や Online Archive of California⁴⁰から閲覧することができる。Miller 氏は、デジタル化の際には著作権に関して悩むことが多く、Scholarly Communications Officer にもしばしば相談していると仰っていた。

また、Miller 氏の案内により、閲覧室とその奥にあるスタッフルーム、大量の資料が保管されている書庫を見学することができた。書庫は温度調整されていて少し肌寒く、スプリンクラーがない代わりに、特殊な防火設備が整っているとのことであった。床には蛍光テープが貼られており、停電等の非常事態が起こっても道が分かるようになっていた。所蔵している中でおそらく一番古い本だという、文字が刻まれた小さい石のようなものも見せていただいた。紀元前の約 4,000 年前に書かれたもので、現在は専門家によって解読され、テキスト化もされているとのことである。

³⁶ <https://cdlib.org/services/collections/licensed/>（最終アクセス：2020/02/07）

³⁷ <https://www.library.ucdavis.edu/service/special-collections-duplication-services/>（最終アクセス：2020/02/07）

<https://www.library.ucdavis.edu/archives-and-special-collections/>（最終アクセス：2020/02/07）

³⁸ <https://ucdlibrary.aeon.atlas-sys.com/logon>（最終アクセス：2020/02/07）

³⁹ <https://digital.ucdavis.edu/>（最終アクセス：2020/02/07）

⁴⁰ <http://www.oac.cdlib.org/institutions/UC+Davis::Special+Collections?limit=online>（最終アクセス：2020/02/07）

2.2.3.2. The Michael and Margaret B. Harrison Western Research Center Collection⁴¹

私のデスクの置かれていた Content Support Services 部門の職員を対象に、Harrison 氏のコレクションに関するツアーが企画されており、私も参加することができた。参加者は私の他に 3 名おり、Special Collections Assistant の Jenny Hodge 氏と Public Services Specialist の Sara Gunasekara 氏より話を伺った。

このコレクションは、80 年以上にわたって収集された、ミシシッピ西部の歴史に関する資料である。Harrison 氏によって UC Davis に寄贈され、現在は Archives and Special Collections 部門が管理している。

コレクションが展示されている Harrison Room では、Harrison 氏の妻がカバーを作成したとされる図書や、Harrison 氏の友人の著書（その友人が直筆で絵を描いているページがある）、絵画が載っている図録、その絵画と同じデザインのブロンズ像、Harrison 氏が実際に使っていたタイプライターやダイヤル式の電話、その他大量の論文やパンフレット等、様々な貴重な資料や品物を目にすることができた。また、コレクションを保管・整理するための箱やラベルは、Harrison 氏が作成したものをそのまま使っているとのことであった。

今回は目録に関わる部門の職員を主な対象としていたこともあり、どの資料が目録作成済みでどの資料がそうではないかという説明や今後の見通しについての相談等、目録に関連する内容が中心だった。また、どの資料にもバーコードは貼られておらず、シールを貼った紙を葉のように図書にはさんでおり、貴重な資料を大切に扱っている様子が伺えた。

2.2.4. Collection Strategies 部門

部門のトップである Bob Heyer-Gray 氏より、業務の概要について話を伺った。Heyer-Gray 氏は、主に図書館の予算の配分決定、図書や電子リソースの購入、寄贈図書の処理に関わっているとのことであった。

図書館で購入する図書の決定には、図書館員や学生による推薦等、様々な方法が取られている。ILL の支援も行っており、リクエストの多い図書については購入を検討することもある。電子リソースについては UC 全体で共有しているため、UC Davis の構成員から電子リソース関連の質問が寄せられたときに、適切な人物へつなぐ役割も担っている。Stanford University 等と協力し、シェアードプリントも実施している。

Heyer-Gray 氏は、図書館資料の潜在的なユーザーは 5,000 人程度いると考えているようだった。例えば、電子リソースのロングタイムトライアルを行うと、教員もそれを授業で活用することができるなど、利用の幅が広がるのではないかという話もされていた。

また、他部署との連携について、UC Davis 内では、主に Content Support Services 部門や Archives and Special Collections 部門、APC 助成関連では Scholarly Communications との関わりが多いとのことだった。UC の他キャンパスの担当者と話をすることもあがるが、

⁴¹ <https://www.library.ucdavis.edu/archives-and-special-collections/michael-margaret-b-harrison-western-research-center-collection/>（最終アクセス：2020/02/07）

対面で会う機会は少なく、テレビ会議を行うことが多い。しかし、実際に会って話すのと画面上で話をするのでは、話の進めやすさや連携の取りやすさが全く違うとのことであった。

3. 他機関への訪問調査

本研修では、1週間までの期間を目安として、UC Davis の近郊の機関への訪問調査を行うことが認められていた。私は Michael Ladisch 氏と相談の上、University of the Pacific、California State University, Sacramento、California Digital Library、UC Berkeley の 4 機関を訪問先として選択した。

以下、訪問順に調査内容をまとめた。

3.1. University of the Pacific : パシフィック大学 (UOP) ⁴²

UOP は、1851 年に創立されたカリフォルニア州の総合私立大学で、メインとなるストックトン以外に、サクラメントやサンフランシスコにもキャンパスを持っている。学生数は約 6,400 人で、80 以上の学科と 30 以上の学位プログラムがある。音楽系の学科があり、ジャズピアニストの Dave Brubeck が卒業生であることでも知られる。赤煉瓦の建築物が大変美しく、図書館も大規模な改修を重ねている最中とのことで、館内は現代的で洗練されている印象であった。

Ladisch 氏が UC Davis に来られる以前に働いていた大学とのことで、元同僚の方々に連絡を取ってくださった。今回の訪問では、図書館のスペシャルコレクションやデジタル設備を見学した後、機関リポジトリ担当者及びアカデミックサポート担当者にインタビューを行った。

3.1.1. スペシャルコレクション

Head of Special Collections の Michael Wurtz 氏が書庫を案内してくださった。主に、ヨセミテ国立公園とも関わりの深い人物である John Muir、有名なジャズバンドである Brubeck、日系アメリカ人に関する資料を見ることができた。スペシャルコレクションは職員しか立ち入れないエリアに保管されているが、電子化されており、ウェブ上で閲覧可能である。日本に関連する資料として、Brubeck の日本を題材にした曲のレコード、日系アメリカ人が戦争で大学を追われた際に書いた日本語の文章やイラスト等も見せていただき、大変興味深かった。

3.1.2. デジタル設備

館内の設備について、Jeremy Hanlon 氏が主に案内してくださった。特徴的だったのは

⁴² <https://www.pacific.edu/> (最終アクセス : 2020/02/07)

The Cube⁴³というサービスで、Virtual Reality 体験ができる PC や器具、3D プリンターやドローン（飛ばすには資格が必要）等が 1 階の開放的なスペースに設置されていた。また、教育用デジタルコンテンツを作成するための設備がかなり充実しており、3 台のモニターを同時に見ながら動画を編集できる部屋、音声の録音・編集ができる防音の部屋、実際に動画を撮影できるスタジオ等が館内に用意されていた。

3.1.3. Scholarly Commons⁴⁴

Head of Publishing and Scholarship Support の Michele Gibney 氏より、UOP の機関リポジトリである Scholarly Commons について話を伺った。Scholarly Commons は、図書館をキャンパスのサービスの中心とし利用者を増加させること、また学内外の人々に対して大学の研究内容等を発信することを目的として、Office of the Provost⁴⁵を通じて 2016 年 11 月に設立された。

3.1.3.1. システム

Scholarly Commons では、bepress⁴⁶というホスティングシステムを採用している。bepress は Berkeley で設立されたが、現在は Elsevier 社に買収されている。現在、約 500 機関がこのシステムを利用しており、Scholarly Commons の検索タブから全参加機関の横断検索をすることも可能である。利用しているのはアメリカの機関が大半で、アジアの機関は少ない。このシステムを採用した理由について Gibney 氏に尋ねたところ、操作や登録が簡単で、サーバーやストレージも全て用意してもらえるからとのことであった。

機能はカスタムが可能である。例えば、Scholarly Commons のトップページ下部の地図には過去のダウンロード件数が表示されるが、その期間は過去 30 日間または今週等、管理者が自在に変更できる。地図上部のカラフルな円も bepress の機能で、リポジトリに登録されているコンテンツを分野ごとに表示している。気になる分野をクリックすると、そのコンテンツページにとぶことができる。

リポジトリの管理者画面からは、アクセスに関する分析結果や特徴を確認できる。特定の分野の研究成果について、コンテンツのダウンロード件数や閲覧件数、アクセスの多い地域に関する情報が得られる。基本的には管理者のみ利用可能な機能だが、リンクを共有すれば、誰でもその分析結果を確認することができる。

Scholarly Commons アカウント（=bepress アカウント）は誰でも作成可能である。アカウントを作成すると、アカウントページやリポジトリのフォロー機能を使用することが

⁴³ <https://www.pacific.edu/university-libraries/services/the-cube.html>（最終アクセス：2020/02/07）

⁴⁴ <https://scholarlycommons.pacific.edu/>（最終アクセス：2020/02/07）

⁴⁵ <https://www.pacific.edu/about-pacific/administration/offices/office-of-the-provost/about-the-office-of-the-provost.html>（最終アクセス：2020/02/07）

⁴⁶ <https://www.bepress.com/>（最終アクセス：2020/02/07）

できる。管理者のアカウントページでは、より多くの機能を使用できる。

システムの問題点としては、モバイル端末用の画面に改善の余地があるなど、些細な箇所のみとのことである。Gibney 氏は、今後も bepress の利用継続を希望しているが、Elsevier 社に買収されたこともあり、状況が変わる可能性もあると仰っていた。

3.1.3.2. スタッフと人材育成

リポジトリを担当しているのは図書館の Digital Initiatives 部門である。ただし、担当者は専任の職員 1 名と学生スタッフ 1 名のみである。学生はスキャンング等を行っており、学生スタッフ向けの詳細なマニュアルも用意されている。専任の職員は、他の大学のスタッフに向けてリポジトリに関するプレゼンテーションを行うこともあれば、自身がそのようなワークショップに参加することもある。

3.1.3.3. コンテンツ

Scholarly Commons には、UOP の教職員や学生の執筆した学術雑誌掲載論文、書籍、書籍のチャプター、学位論文、プレゼンテーション、会議録等が含まれる。数は多くないが、学生が執筆及び編集を行っている学内紀要もあるとのことである。オープンエデュケーションリソースとして、授業で使う教科書も一部登録されている。

Gibney 氏は、感覚的には学内教員の論文の 25～35%程度は登録されているように思うと仰っていた。分野としては、生物学、化学、心理学、健康科学等の分野の登録が多く、人文科学や英語、現代語等の分野からの登録依頼は少ないとのことである。

また、スペシャルコレクションもリポジトリから閲覧可能である⁴⁷。本学とは異なり、機関リポジトリとデジタルアーカイブの機能が統合されているが、以前は分かれており、OCLC 提供の CONTENTdm⁴⁸にスペシャルコレクションを登録していたとのことである。他に、スポーツの試合の映像等の動画も登録されている。

3.1.3.4. 登録手順

Scholarly Commons に登録するコンテンツのメタデータは、ジャーナルのウェブページや研究者から送られるファイルの情報をコピー＆ペーストして作成している。データは Excel に入力して管理している。研究者が直接データを編集することはできないため、必要があれば、リポジトリ担当者がデータの修正を行っている。

著作権情報については、SHERPA/RoMEO⁴⁹で調べたり、出版社に直接問い合わせたりして確認している。PDF の登録が認められない場合には、URL のみの登録も行っている。著者最終稿のみ登録可能な場合もあるが、教員は著者稿の提供にあまり積極的ではないとの

⁴⁷ <https://scholarlycommons.pacific.edu/hasc/>（最終アクセス：2020/02/07）

⁴⁸ <https://www.oclc.org/en/contentdm.html>（最終アクセス：2020/02/07）

⁴⁹ <http://sherpa.ac.uk/romeo/index.php>（最終アクセス：2020/02/07）

ことである。

登録の際にはそのコンテンツの関連分野を選択することができ、一つのコンテンツに対して複数の分野を選択することも可能である。これにより、Google 等で検索した際にヒットしやすくなる。また、Scholarly Commons は教員のプロフィールページ⁵⁰とも連携しており、その管理も行っている。リポジトリに研究成果をアップロードすると、同時にプロフィールページにも登録し、リンクさせることが可能である。なお、コンテンツへの DOI の付与は行っていないとのことである。

また、コンテンツを削除した事例もある。今までには Brubeck のコンテンツを所有者の意向で取り下げたことがある。学位論文の閲覧については、希望により学内からのアクセスのみに制限している場合もある。

3.1.3.5. 登録の推進

登録を増やすために、チラシの作成、メールの送付、プレゼン、部門内でのミーティング等を行っている。これらの活動の結果、今までより登録申請をしてくれるようになった研究者もいる。担当者によると、特に新しく大学にきた教員は積極的に取り組んでくれる印象とのことである。

なお、UOP ではオープンアクセスポリシーを制定しておらず、リポジトリへの登録も任意である。登録を希望する研究成果があれば、リポジトリ担当者までその都度メールを送ることになっている。

3.1.3.6. 研究データ

研究データの登録も可能だが、今のところ登録した事例はない。ただし、登録を希望している研究者はおり、メタデータ作成等の準備が整い次第、登録する予定である。具体的には、研究プロジェクトのアーカイブデータとして、10,000 枚以上の写真を追加することになっている。公式な研究データポリシーは存在しないが、データの容量やファイルタイプにシステム上の制限はないため、特に問題はないとのことである。

3.1.3.7. 他部署との連携

Office of the Provost は、Scholarly Commons 設立後も、初年度の資金を獲得し、リポジトリ担当者を雇用するなど、多くの面で支援を行っていた。現在も、リポジトリ運営資金は Office of the Provost 及び図書館から得ているとのことである。大学院や Office of Research and Sponsored Programs⁵¹、Center for Teaching and Learning⁵²等、図書館外の部署とも

⁵⁰ <https://scholarlycommons.pacific.edu/experts/>（最終アクセス：2020/02/07）

⁵¹ <https://www.pacific.edu/academics/research-and-scholarship/office-of-research-and-sponsored-programs.html>（最終アクセス：2020/02/07）

⁵² <https://www.pacific.edu/about-pacific/administration/offices/office-of-the-provost/faculty-affairs-and-resources/center-for-teaching-and-learning.html>（最終アク

連携を取っている。

3.1.4. アカデミックサポート

Head of Library Research and Learning Services である Veronica Wells 氏より、主に情報リテラシー教育について話を伺った。Wells 氏は教育に焦点を当てたチームの一員であり、Collection Development にも関わっている。また、Associate Professor として論文執筆やプロジェクトの実施も行っており、1 年ほど前には、専門分野である音楽に関する辞書を 1 名の研究者と共同で出版したとのことであった。

3.1.4.1. 情報リテラシー教育の概要

図書館では、論文執筆の際に役立つ授業やワークショップを実施している。例えば、音楽分野について学んでいる 1～2 年生向けに Wells 氏が開催したワークショップは、それぞれの学生が研究トピックを 1 つ決めて、その内容に関する 3 つのリソースを探し、全体で評価及び議論するというものだった。リソースは何でもよく、図書やジャーナル、新聞、ウェブサイト、ビデオ等があった。他に、データベースの使い方を実演したこともある。参加する学生の人数はそのときによって異なるが、15～20 人程度の規模であることが多い。1 年生 50 人程度に対してセッションを行ったり、論文執筆中の学生に 1 対 1 でアドバイスをしたりした例もある。

また、アメリカではフェイクニュースの問題が大変重要であり、学生にも正しい情報の見極め方や複数のソースを確認することの大切さを教えているとのことであった。「なぜ図書館や図書館員が必要なのか」、「Google があれば何でも調べられる」と問われることもあるが、情報リテラシー教育はその一つの答えだと思う、と Wells 氏が仰っていたのが印象的だった。

3.1.4.2. Information Literacy Assessment⁵³

2017～2018 年には、368 人の学生を対象として、情報リテラシースキルに関する調査を実施した。これによって、学生の情報リテラシーに関わる強みや弱みを把握することが可能になった。

また、以前に実施した同様の調査で、同じ学生に対して入学直後と卒業前に追跡調査を行ったこともある。学生のスキルは向上していたが、図書館サービスがその要因であるかは分からないとのことであった。

3.2. California State University, Sacramento : カリフォルニア州立大学サクラメント校

セス : 2020/02/07)

⁵³ <http://libguides.lib.pacific.edu/faculty/assessment> (最終アクセス : 2020/02/07)

(CSUS) ⁵⁴

1947年に創立されたCSUSは、カリフォルニア州の州都サクラメントに位置する大学である。州全土に23のキャンパスを持つカリフォルニア州立大学（California State University : CSU）のうちの1校で、教育に力を入れていることで有名である。約60の学部、40以上の修士プログラム、2つの博士プログラムを提供している。

図書館は緑を基調とした落ち着いたデザインで、誰でも無料で使える携帯充電ロッカーや、文房具を販売している自動販売機が館内に設置されていた。今回の訪問では、主に Scholarly Communication や Collection Management Services、Technology Services に関わる5名の方々にお会いすることができた。

3.2.1. Scholarly Communications

Scholarly Communication Librarian である Daina Dickman 氏より、業務内容や他部署との連携について話を伺った。学内から寄せられる著作権関連の質問には、法学の学位を持つ別の図書館員が対応している。オープンエデュケーションリソースの取り組みにも関わっており⁵⁵、書店から教科書のリストや、可能であればノートブックを購入している。

また、学内の部署である The Office of Research, Innovation & Economic Development⁵⁶とも連携を取っている。図書館のスタッフミーティングに参加してもらい、機関リポジトリやデータ管理計画（DMP）、APC について議論することもある。

Office of Graduate Studies⁵⁷との連携や、ハゲタカジャーナルに関する取り組みも行っている。例えば、英語が母語ではない学生は、英文ジャーナルに論文を投稿する代わりに試験を免除できるというオプションがあるが、中には、ハゲタカジャーナルに論文を投稿してしまう学生もいる。そのため、Office of Graduate Studies から図書館に、ハゲタカジャーナルに関する質問がときどき寄せられている。今までに約10件の質問が寄せられているとのことである。

なお、Elsevier 社の交渉については、UC と同じく、キャンパスごとではなく CSU の組織レベルで行っているとのことであった。

3.2.2. ScholarWorks⁵⁸

Collection Management Services 及び機関リポジトリに関わる Elyse Fox 氏らより、話を伺った。CSUS の機関リポジトリである ScholarWorks には、学位論文やポスター、学生

⁵⁴ <https://www.csus.edu/>（最終アクセス：2020/02/07）

⁵⁵ <https://csus.libguides.com/c.php?g=768286&p=5510265>（最終アクセス：2020/02/07）

⁵⁶ <https://www.csus.edu/experience/innovation-creativity/oried/>（最終アクセス：2020/02/07）

⁵⁷ <https://www.csus.edu/graduate-studies/>（最終アクセス：2020/02/07）

⁵⁸ <http://csus-dspace.calstate.edu/>（最終アクセス：2020/02/07）

の研究、教員の出版物、データセット、教科書等、様々な種類のコンテンツが登録されている。CSUS の大学院生は、学位論文を ScholarWorks に提出することが義務付けられている。研究者は、コンテンツのメタデータを編集することができる。研究者が出版を希望し、コンテンツを削除した事例がある。オープンアクセスポリシーはなく、ORCID との連携も行っていないとのことである。現在は Dspace システムを使用しているが、今後別のシステムに移行予定である。

また、スタッフ向けのトレーニングとして、ScholarWorks に関するワークショップやシンポジウム等を行っている。ただし、著作権やデータ管理等、Scholarly Communication 全般に関する他の内容も含むものである。先日実施したシンポジウムには、他の CSU キャンパスの Scholarly Communication Librarian 等が参加したとのことであった。

3.2.3. Health Sciences Librarian

Health Sciences Librarian の Rachel Keiko Stark 氏より、経歴や業務内容について話を伺った。Stark 氏は CSUS で 3 年ほど働いており、それ以前は Hospital Librarian だった。健康科学については、Hospital Librarian としてのバックグラウンドはあったものの、CSUS に来てから E コース等で勉強を始めたとのことである。現在は、多くの教員と一緒に働いており、教員に対して出版等に関する支援を行っている。Stark 氏は、クリニカルサイドやアカデミックサイドで教員と関わることができるのは面白いと仰っていた。

機関リポジトリについて尋ねたところ、健康科学を学ぶ学生や教員は特に、リポジトリへ論文を登録することに関心が高いとのことである。他の学生の論文をリポジトリで閲覧したいという需要があることや、ほとんどの学生が大学院に進むため、研究成果を登録する機会が多いことも一因ではないかと仰っていた。

3.3. California Digital Library : カリフォルニア電子図書館 (CDL) ⁵⁹

CDL は、1997 年に UC によって設立された組織である。UC Library と連携し、UC の膨大なコレクションと利用者をつなぐ、システムの開発や管理を行っている。UC の機関リポジトリである eScholarship Repository⁶⁰も CDL が管理している。また、国際的なデータリポジトリである Dryad⁶¹とも連携して研究データ管理を推進している。

CDL はオークランドのビルの一隅にあり、こじんまりとした雰囲気のおフィスであった。今回の訪問では、Publishing and Special Collections 部門の Alainna Therese Wrigley 氏、Catherine Mitchel 氏、Rachel Lee 氏にインタビューを行った。

⁵⁹ <https://cdlib.org/> (最終アクセス : 2020/02/07)

⁶⁰ <https://escholarship.org/> (最終アクセス : 2020/02/07)

⁶¹ <https://datadryad.org/stash> (最終アクセス : 2020/02/07)

3.3.1. eScholarship 及びオープンアクセスポリシー⁶²

eScholarship は、UC のオープンアクセスリポジトリ及び学術出版のプラットフォームとして、eScholarship Repository 及び eScholarship Publishing のサービスを提供している。

UC のオープンアクセスポリシーは、2012 年に UC San Francisco で採択され、その後 10 キャンパス全てを対象とするポリシーが 2013 年に定められた。これにより、UC の教員が執筆した論文が、eScholarship Repository で広く公開されるようになった。また、2015 年には、ポリシーの対象となる研究成果の範囲が拡大され、UC で論文を執筆する全ての著者（講師やポスドク、図書館員、大学院生等を含む）に対して、論文をオープンにすることが義務付けられた。なお、このポリシーは Scholarly Articles を対象としており、学術雑誌掲載論文に限らず、会議録等も含んでいる。現在は 2020 年に向けて、セカンドフェーズの検討中であるとのことであった。

3.3.2. eScholarship Repository

eScholarship Repository は 2002 年にリリースされて以降、UC の 10 キャンパス及び関連する研究センターの機関リポジトリとして活用されている。コンテンツには、UC の研究者が執筆した学術雑誌掲載論文やワーキングペーパー、学位論文、会議録等が含まれる。学部生や大学院生によるジャーナルを含む、80 以上のオープンアクセスジャーナルも eScholarship Repository で公開されており、論文だけで約 203,000 件、全体で約 243,000 件が登録されている。

UC の研究者は、UC Publication Management System にログインし、自身の研究成果のリポジトリ登録に同意することで、ほぼ機械的に登録を行うことができるようである。著者が著者稿等の論文ファイルを登録していないものは、誰もメタデータにアクセスできない状態で、ダークコレクションとして記録される。

3.3.3. eScholarship Publishing

eScholarship は、UC 関連の様々な研究成果をオープンアクセスで出版するためのプログラムを提供している。編集及び査読システム等の出版ツール、専門的なサポート、コンサルティングサービスもその一部であり、それらは UC の研究者に無料で提供されている。現在、出版は eScholarship Repository での PDF 公開に限定されているが、必要に応じてプリントオンデマンドサービスも利用することが可能である。

カリフォルニア大学出版局（University of California Press : UC Press）⁶³は別組織であるものの、しばしば連携を取っている。UC Press にはオープンアクセスのジャーナルもあ

⁶² <https://osc.universityofcalifornia.edu/scholarly-publishing/uc-open-access-policies-background/systemwide-senate/>（最終アクセス：2020/02/07）

⁶³ <https://www.ucpress.edu/>（最終アクセス：2020/02/07）

るが、購読していないと閲覧できないものが多い。一方で、eScholarship のジャーナルは全てオープンアクセスで、基本的にはコストがかからず、APC も不要である。なお、eScholarship は UC Press と異なり、Editorial Board は持っていない。

他部署との連携や情報共有について尋ねたところ、UC の Scholarly Communications Officer とともに協力しており、度々議論を行っているとのことである。また、TSPOA⁶⁴では時折ウェビナーが開催されており、出版やオープンアクセスモデルへの移行等に関する問題を扱っていると紹介いただいた。

3.4. UC Berkeley : カリフォルニア大学バークレー校⁶⁵

UC Berkeley は、1868 年に設立されたカリフォルニア州バークレーに本部を置く州立大学である。UC の 10 キャンパスのうち、最も歴史の古い大学である。約 30,000 人の学部生と約 12,000 人の大学院生が在籍し、350 以上の学位プログラムがある。文武両道の大学であることでも知られ、多くのノーベル賞受賞者やオリンピックのメダリストを輩出している。

UC Berkeley には 24 の図書館がある。私はその中でも、キャンパスの中心に位置する Doe Memorial Library⁶⁶を訪ね、Scholarly Communications 部門の Rachael Samberg 氏、Timothy Vollmer 氏にインタビューを行った。

3.4.1. Scholarly Communications 部門の概要

この部門には、現在 3 名の職員が所属している。Samberg 氏が UC Davis での Ladisch 氏の役割に近く、許諾や申請等、コンテンツの利用に関する業務を担当している。3 名の中で役割分担もあるが、ワークフローは基本的に同じで、全体としては出版や著作権に関わる支援が中心であるとのことである。

オフィスには教員や学生と直接話せるスペースも用意されており、メールもしくは対面で幅広い相談に応じている。フェアユースや本のチャプターの著作権に関する質問、新しくジャーナル出版を始めたい場合や、学外の団体と共同で出版したい場合の相談にも対応している。

ワークショップの企画も行っており、オープンアクセスウィークには、3 つのワークショップを行った。学術的なインパクトの最大化を目的とし、大学院生やポスドク等の研究者を対象としたものや、パネルディスカッションを開催した。

Digital Lifecycle Program Steering Committee⁶⁷にも関わっており、コレクションのデジタル化及びオンラインでの利用、著作権、プライバシーに関する問題を担当している。

⁶⁴ <https://tspoa.org/> (最終アクセス : 2020/02/07)

⁶⁵ <https://www.berkeley.edu/> (最終アクセス : 2020/02/07)

⁶⁶ <https://www.lib.berkeley.edu/libraries/doe-library> (最終アクセス : 2020/02/07)

⁶⁷ <https://www.lib.berkeley.edu/about/digital-lifecycle-program-steering-committee> (最終アクセス : 2020/02/07)

Teaching and Learning⁶⁸や Berkeley Educational Technology Services⁶⁹とも連携している。業務に関する相談の場としては、About the University Information Policy Office (UIPO)⁷⁰も活用している。申し込みをすればメーリングリストに登録され、他の人々とつながることができる。

UC Davis との違いについて尋ねたところ、教員というよりも、学部生やポスドクも含めた研究者に焦点を当てたサービスを行っていることが挙げられた。また、オープンアクセス基金について、UC Berkeley には TOME Fund はないが、他のもので代用しているとのことであった。一方 Ladisch 氏は、UC Davis では部門に自分 1 人しかおらず、オフィスも他の部門と離れているため、他の図書館員と気軽にコミュニケーションをとることができない、また、上司である Beth Callahan 氏は他の部門のトップでもあり、ミーティングの時間を確保するのが難しい場合があると仰っており、組織の構成に関しても違いがあるようだった。

4. 研修成果の活用方法・フィードバック

今回の研修では、非常に多くの方々とのミーティングの機会を設けていただき、幅広い業務分野に関する話を伺うことができた。本章では、研修のメインテーマであったオープンアクセス及びオープンサイエンスに向けた取り組みを中心に、いくつかの観点から、まとめと本学へのフィードバックについて述べる。

4.1. UC Davis における Scholarly Communications Officer の業務

オープンアクセス出版については、特に UC と Elsevier 社との交渉状況についての話が大変興味深かった。Ladisch 氏によると、研究者から不満の声が上がってはいるものの、事前に予想していたほど多くはないとのことで、研究者も一定の理解を示しているようであった。図書館としての代替手段の提供方法や、このような状況に対する研究者の反応については、本学でも、今後出版社との交渉を続けていく上で大変参考になる。

オープンアクセス基金については、UC としてゴールドオープンアクセスを推進していることもあり、かなり手厚い支援を行っていると感じた。本学では機関リポジトリを活用したグリーンオープンアクセスを重視しているため、状況は異なるが、明確な基準を設けた上で、平等で一律な支援を行うことは、研究者の意識向上や業務の効率化につながると考えられる。

また、今回の研修では、アメリカの著作権について学ぶのに多くの時間を費やしたが、オープンアクセスを推進する上で、著作権は重要な問題の一つである。本学でも、例えば機関リポジトリで論文公開を進める際に、共著者の許諾が得られない等、著作権処理が研究者に

⁶⁸ <https://technology.berkeley.edu/teaching-learning> (最終アクセス：2020/02/07)

⁶⁹ <https://www.ets.berkeley.edu/> (最終アクセス：2020/02/07)

⁷⁰ <https://kb.iu.edu/d/akbg> (最終アクセス：2020/02/07)

とって障害となることも多い。私が訪問した機関では、**Scholarly Communications** 部門や法学の専門家が窓口となり、利用者からの問い合わせへの対応を行っていた。このように、著作権に関する相談を広く受け付けられる体制を整えることも、オープンアクセスを進める上では重要だと考えられる。

4.2. 機関リポジトリ及びオープンアクセスポリシー

機関リポジトリについては、UC の **eScholarship Repository**、UOP の **Scholarly Commons**、CSUS の **ScholarWorks** に関する話を伺うことができた。採用しているシステムは様々で、オープンアクセスポリシーを採択しているのは UC のみであった。特にシステム面の話は新鮮だった一方で、リポジトリへの具体的な登録手順等については、本学で行っている業務と近い部分も多く、より詳しい実務的な話を伺えて大変参考になった。

UC では、ポリシーの対象者に図書館員や大学院生も含まれるなど、本学と比べて範囲が幅広い。対象となる研究成果のリポジトリへの登録は義務化されているが、浸透率はそこまで高くないとのことで、その点では本学と状況があまり変わらないように感じた。

研究データについては、機関リポジトリにまとめて登録している機関や、別にデータリポジトリを構築している機関があった。各機関がどのようにデータリポジトリを構築しているかは、今後本学で検討を進める上でも参考にすべきであるが、当初予定していた UC Davis の **Data Management Program**⁷¹担当者とのミーティングが実現せず、UC でのデータ管理サービスや **Dryad** に関する詳しい話を伺えなかったのは大変残念だった。

4.3. 組織及び人員体制

今回、カリフォルニアを代表する大学組織である UC 及び CSU のキャンパス、私立大学、電子図書館等、様々な規模の機関を訪れることができたのは、大変有意義であった。ポジションごとの採用であるがゆえに、少人数体制の部門や、各自の役割が明確に分離している部門が多い印象を受けた。個人の専門性による部分が大きく、人が変わった際の引き継ぎに苦労するという面もあるが、他部門や他キャンパスの担当者と、相談及び情報共有をし合える環境が構築されていた。また、部門内に相談相手がいない場合や、距離が離れていて対面での会話が難しい場合には、テレビ会議を積極的に行うといった工夫をしていた。他部署とのコミュニティ構築に関しては、本学でも重要な課題であると考えられる。

4.4. その他

職場の雰囲気や仕事に対する姿勢も、日本とはかなり異なっていた。基本的に、どの部署でも一人一人のデスクが衝立で区切られており、自分のペースで集中して仕事に取り組める環境が整っていた。残業をしている人も少なく、家族との時間を大切にしている人が多い

⁷¹ <https://www.library.ucdavis.edu/service/data-management/> (最終アクセス : 2020/02/07)

印象だった。勤務時間もフレックス制を採用していたり、金曜日は在宅勤務を行う人が多かったりと、それぞれのライフスタイルに合わせて柔軟に働き方を選択することができるようだった。一方で、自由な働き方ができるからこそ、各自が自分の仕事に責任を持ち、効率的な時間の使い方を考えながら業務に取り組んでいるように感じられた。公私を上手く切り分け、適度にリフレッシュしつつ上手く仕事を進めるアメリカ人の姿勢は、私にとっても見習うべきものであった。

5. おわりに

デービスで 2 ヶ月間過ごした経験は、私にとってかけがえのないものとなった。周りの方々は大変親切で、英語の上手くない私の話も粘り強く聞いてくれた。特に **Michael Ladisch** 氏とは長い時間を共に過ごし、公私ともに大変お世話になった。各部門とのミーティングや他機関訪問に同行してくれたり、生活面でトラブルが起こった際に一緒に対応してくれたりしたことは、私にとって大変心強かった。また、**Ladish** 氏を始め、多くの方々が日本人や日系人の知り合いを紹介してくれた。人のつながりの輪が広がっていくのを実感すると同時に、異国の地で私が心細い思いをしないように、という周りの方々の気遣いがありがたく思った。今後の業務においても、そのつながりを大事にしつつ、本学の国際化と発展に貢献していきたい。

最後に、私をあたたかく迎えてくださった **Peter J. Shields Library** 及び **Global Affairs** の皆様、娘のように扱ってくれたホームステイ先のご家族、日本に興味を持ち仲良くしてくれた **UC Davis** の学生たち、研修を通して支えてくださった国際交流課及び附属図書館の皆様には、心より御礼申し上げます。